

古代絃楽器の瑟

「士は故無くして琴・瑟を徹めず」（『礼記』曲礼下）とあり、古代では琴・瑟の奏樂が一つのたしなみとされていたようである。瑟と併称される「琴」は、かの孔子も奏でたとされ、いま日本で謂う「お琴」とは違い、7本の絃を張っただけの簡素なもので、琴柱も使われていない。それに比べて「瑟」は25絃のものが多く、琴柱も使い、古代の祭礼の主要楽器であった。前回笙について述べた際にも引用した『詩経』小雅「鹿鳴」に、饗宴の歌として「我に嘉賓有り、瑟を鼓き笙を吹く」とあり、『儀礼』郷飲酒礼篇でも、瑟は笙とともに奏樂の主要楽器とされた。さらに『詩経』と並んで先秦時期を代表する詩のアンソロジー『楚辞』の「遠遊」にも、「湘水の精霊に瑟を演奏させる（湘靈鼓瑟）」という記述もみえ、瑟は確かに中国古代の奏樂に必須の楽器であったらしい。琴とならんで、みながよく知る楽器であったから、琴瑟の調和が、夫婦・兄弟の仲の良いたとえとして用いられたのであろう。『詩経』小雅「常棣」にも、「妻や子の睦まじいことは琴・瑟を奏でるようで、兄弟が集まれば、親しく楽しみあう（妻子好合、如鼓瑟琴、兄弟既翕、和楽且湛）」などと用いられた。



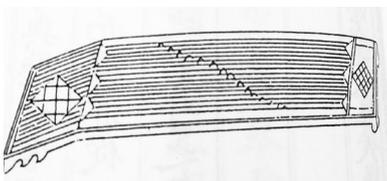
その形状は、出土楽器にみえ、春秋晩期のものの復元（左写真 宜昌市博物館）や、戦国中期のもの（右写真 荊州博物館）など多く展示されている（『中国音楽文物体系 湖北巻』より）。

それでは瑟はどんな音色だったのか。祭礼に用いられた瑟のゆったりとした奏樂のさまが、『礼記』樂記に記されている。

宗廟の大祭では「清廟」の詩を歌うが、そのとき用いる楽器の瑟は、濁った音を出す朱い練り糸を絃にし、瑟の底に音をゆるくする大きな孔がある。そして一人が弾唱すると三人が唱和するというもので、先王の音楽のなごりである。

（清廟之瑟、朱絃而疏越、壹倡而三歎、有遺音者矣）

瑟は、宮中祭祀のために中国雅楽器として伝承された。宋代に編まれた『樂書』樂図論「雅部」には、以下の絵がみえる。



宋代以降も、明代や清代でも雅樂には用いられていたことは、「明会典」や「皇朝礼器図式」（『中国古代器物大詞典 楽器』河北教育出版社、2009年、214頁）などからも理解される。

唐代の瑟

唐代には、白居易「五絃弾」（『白居易集箋校』巻3）で、当時巷で流行の五絃の琵琶と比べて瑟を次のように言う。

私が聞くところでは、正始の音（古代先王の由緒正しい音楽）というのはこんなものではないのだ。朱い練り糸を絃にし、底に音をゆるくする大きな孔がある瑟で奏でる「清廟」の歌は、一人が弾唱するとそれを繰り返し唱和し、節回しは淡泊で、ゆっくりとした拍子で、声も少ない。なご

やかでのびのびしていて天地自然の元気をまねきよせ、これを聴くと思わず知らずに心が平和になる。人間というものは今を重んじて古を軽んずる。古琴は絃が張ってあっても弾くものもない。趙璧の五絃琵琶の藝が完成してからは、（そんな正始の音を出す）二十五絃の瑟は五絃琵琶にはとうてい敵わなくなった。（吾聞正始之音不如是。正始之音其若何、朱絃疎越清廟歌、一弾一唱再三歎、曲淡節稀声不多。融融曳曳召元氣、聴之不覺心平和。人情重今多賤古、古琴有絃人不撫。更從趙璧藝成來、二十五絃不如五）

唐代には、瑟は一般に用いられていたのだろうか。音楽を愛好した白居易の詩篇には、瑟について実際に使用された楽器として具体的にその音色などを詠じたものは見当たらない。ただ、「箏」（『白居易集箋校』巻31）と題する詩に、「趙瑟 清くして相い似たり、胡琴 闇がしくして同じからず」とあり、箏は瑟に似ているが、胡琴（琵琶のこと）の騒がしいとは違うと言う。ここで取り上げられた箏は、瑟と同じく琴柱を使用する13絃の楽器で唐代に多く用いられていた。日本の正倉院には確かに瑟の残欠（尾部の板一枚）が残されており、『東大寺献物帳 国家珍宝帳』（天平勝宝8載（756）の目録）には、「楸木瑟一張」との記載はある。しかしながら、その後日本の雅樂では使われることがあまり無かったようである。「箏」も、『国家珍宝帳』に記載され、正倉院に残欠があり、四面はあったとされている（岸辺成雄『天平のひびき 正倉院の楽器』音楽之友社、1984年、28頁）。その後、日本では箏が雅樂器として用いられ今に至ることを考えると、瑟に替って形態が同じ箏が用いられたという推測も可能かもしれない。宋代に編まれた『集韻』には、「ある説には、秦人の薄義親子が瑟を争って壊して二つにしたので、箏と名付けられた（一説秦人薄義父子争瑟而分之、因以為名）」とあるほどであるから。

瑟がつくる夢幻の世界

瑟は、唐詩のなかでは実際の奏樂よりも、古代との繋がりでのなかで詠じられた。先にも述べた『楚辞』遠遊の「湘靈鼓瑟」を題材とした科挙の試験があり、神仙世界の音楽をいかに美しく詠じるかが競われた。瑟を詩題にした有名作品は、晩唐詩人李商隱（字は義山、811～858）が、失われた恋の悲しみを、模糊としたイメージで綴る「錦瑟」（『李義山詩集』巻上）である。

錦瑟無端五十絃	錦瑟 端無くも五十絃
一絃一柱思華年	一絃一柱 華年を思う
莊生曉夢迷蝴蝶	莊生の曉夢 蝴蝶に迷い
望帝春心託杜鵑	望帝の春心 杜鵑に託す
滄海月明珠有淚	滄海 月明らかにして珠に涙有り
藍田日暖玉生煙	藍田 日暖かにして 玉 煙を生ず
此情可待成追憶	此の情 追憶を成すを待つ可けんや
只是當時已惘然	只だ是れ當時已に惘然

詳しくは川合康三『李商隱詩選』（岩波文庫、2008年）の解説に譲るとして、詩と現実の結びつきを故意に曖昧にするとされる李商隱が、『李義山詩集』の巻頭を飾る代表作の詩題に「瑟」を選んだところに、人を夢幻の世界へ誘う楽器として、実用とは距離をおく唐代の瑟のありかたの一端が垣間見える。